



今月の編集は＜東海BOC＞ 111号 400円

＜東海BOC＞の7年

＜東海BOC＞の実行……………	3
私にとっての＜東海BOC＞……………	4
山下智恵子 羽後静子 池戸清子 篠原ナミ子 倉上雅子 倉田良江 太田侑希 祖父江富士子 深田セツ子 高橋ますみ	
＜東海BOC＞ってこれでいいの?……………	17
輝いて生ききった女のひと ほか……………	18
人材派遣 110 番もスタート ほか……………	20
自らを装う……………	21
あごらのあごら……………	22
女の講座・女のつどい……………	2



＜東海BOC＞の女のスペース、＜スペース・ウイン＞開所日には名古屋市長も来訪して祝辞を

・女の講座・女のつどい

□あごら旭川（第3土曜・13時30分—16時）

・旭川市緑ヶ丘5-4 那須友子

• 📞 0166=651=5690

☐ あごら札幌（毎月13日喫茶「ミドリ」）

・札幌市豊平区平岸1条1丁目6-110 細谷洋子

• 011=823=0738 7062

☐ あごら仙台（時間、会場とも流動的）

・仙台市茂庭字生出前 4-65 三船照子

• ☎ 0222=45=5994 ☎ 982-02

□ あこら柏 (第3金曜・18時～20時)

・千葉県印旛郡白井町太山1-7-20 桑原ちる子

・ 0474=91=4843(夜間) 〒270-14

□あごら新宿 ①毎月第3金曜・18時～20時

②毎月8日(水、土、日はその前日) 11時—13時

①②とも「あごら」読書室

・新宿区新宿1-9-6 斎藤千代

• 03=354=3941 (BOC) \mp 160

□ あこら武蔵野(第4土曜・19時)

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-5-1 日本橋三井ビルディング5F 三井物産株式会社
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-5-1 日本橋三井ビルディング5F 三井物産株式会社

• 小平市小川町 1-763-86 丹
• ☎ 0422-42-6710 二187

□ 本 日 本 一 / 第 2 本 腰 14 時 - 16 時

■あごら京王

・調布市仙川町3-12-32 杉

• 03=308=7871 182

☐ あごら東海（時間・会場とも流）

・名古屋市区西平由町

• 052=501=6

☐ あごら京都

・京都市左京区一乗寺築田町

• 075=791=4623 \mp 606

☐ あgora大阪 (第3日曜・11時30分)

・吹田市岸部中 1-29-4

• 06=387=6574 564

□あごら山口(第1日曜・1

下関市佐々木町 18-5

- ・ 下関市竹崎町 2
- ・ ☎ 0832=32=8

☐ あごら島取

・鳥取市土海1147 喜菜田地

• 0857=23=3074 千680

□ 本二二二州(第2十曜・14時30分、第4十曜)

□あこち九州(18時30分、補)

・福岡市中央区筥丘2-4-6 小島サカエ

• ♁ 092=521=7624 ♁ 810

□ あごら佐世保 (第2・4金 12時 佐世保)

・佐世保市瀬戸越町 3-21-8 肉用

• ☎ 0956-49-8591 〒857-01

□**広島**『あごら』

[illegible]

〈東海BOC〉の実行

△東海BOC△が榮に、女のスペースSWINNをオープンした。

名古屋で榮と言えば東京では銀座。松阪屋のすぐそばと言う。「いつか榮に店を出すから」が高橋ますみさんの口ぐせだったが、その夢がとうとう実現したのだ。東京の△BOC△に十数年おくれてスタートした△東海BOC△、幼いと思っていた妹がはるかに背丈を追い越したような喜びでいっぱいになった。

考えてみるとこの七年間、△東海BOC△は、いつも前へ前へと歩み続けていた。時には勇み足になったり五歩後退もしたけれど、常に目標を公言し、ネアカに徹して実行し続けた名古屋女の気迫が成功のカギだったと思う。

有言実行は不言実行よりもマイナーに評価されがちだが、本当は不言実行よりもはるかにむずかしいことではないだろうか。「言^{こと}挙げ」するのは「思い」があるからで、思いなくしては言葉は生まれない。言葉が生まれても多くの人がそれをのみこんでしまうのは、実現できなかつたときの非難を恐れるためだろう。失敗に終わってもいい、やるだけはやる、といういさぎよさを女の人たちがもっと果敢に持つようになれば、それぞれの思いが実現していく可能性はずっと高まるのでは、と思う。

この号で紹介される事例も「言^{こと}挙げ」の一つだが、からだを張って言葉をさらしていく名古屋女の姿勢に私は感動している。

(斎藤千代)

私にとっての〈東海BOC〉

私が見てきた

〈東海BOC〉

山下 智恵子

一人では不可能なことも、複数で力を出しあえば、何ごとかを成すことが可能ではないか。この考えかたは、戦後民主主義の洗礼を強烈に受けた世代には、受け入れやすい。多数決とか団体交渉といった言葉にもなじみが深いし、ライオンにたちむかう円陣を組んだ縞馬の話も知っている。

〈東海BOC〉は、発足以来、グループの力を信じるという精神に支えられて続いてきたように、私は思っている。私自身は、文学という孤独が伴侶の仕事を選んでしまったので、〈東海BOC〉にスタッフとしては関与されない。それでも、マラソンランナーの伴走者のようなつも

りでいる。声援を送り、時々には自転車で傍らをとりに走っている。けれどもランナーの足の痛さや心臓の破れそうな苦しさまでは、替って荷うことはできない。息使いの荒さや表情から察して、わずかに汗をぬぐうハンカチをさしだしたり、ガンバレと声をかける程度の存在である。

電通から企画をまかされた米まつりの頃は、歩きだしたばかりで足もともおぼつかなく見えた。主婦デザイナーを売り出したアイデア・ファクションショーの時は、私も着物地を提供してモデルもひきうけ、文化祭、大学祭の延長のようにすっかり楽しんで参加した。やがて、〈東海BOC〉がM新聞の紙面の一部をまかされる頃には、かなりの経験を積み、グループとしての力も着実に伸びてきたように、傍目には感じられた。グループで仕事をすることのメリットは、一人が自信を失くしても、他のメンバーが活気

にみちていれば、カバーすることができることなどである。一方、各自の仕事への責任感が、稀薄になり、もたれあうといった危険性もつねに孕んでいる。そこを、どう兼ねあわせて、支えあい補いあってゆくかが、むづかしい。

ビルの八階にあった事務所が、念願かって名古屋市の中心地 栄に移転できたことは良かったと思う。

ゴッドマザー的な包容力の大ききで仕事に対する高橋ますみさんと、柔軟な姿勢で支える明るい桜井京子さんと、事務処理能力と割り切りの良さを持つ奥村和子さんのトリオは、私に「絶妙の配材」という言葉を思いおこさせる。

男社会にはない新しい働きかたを模索し、自分だけでなく、仲間と一緒に、をめざすトリオの活躍を、この気ままな伴走者は心から願ひ夢みている。ミニ老人ホームが完成したら、入居者第一号にし

てもらおうと、心待ちにしている。

△東海BOCVと

ネットワーク

羽後 静子

それぞれの立場から△東海BOCVについて書くことになった。

今年は△BOCVにとって飛躍の年となった。一月から、毎月の例会であるビジネスセミナーが始まった。五月にはスベース・ウインがオープンした。△BOCVの六年間を記録した『女40歳の出発』も出た。

△BOCVは、一般的には、女性の能力を登録しておく人材バンクのようなグループと認識されているようだが、それだけでは説明しきれないところが大きい。私はむしろ△BOCVを軸としたネットワーク作りに関心を持っている。△BOCVで出会った仲間がふえるにつれて、グループ活動の潜在的なパワーや可能性を自分なりに追求したいと思うよ

うになった。現在の△BOCVのあり方や是非を議論することは、自分と△BOCVの位置づけや自分の生き方を問われることでもあった。

昨年の夏、私はナイロビ婦人会議に参加した。私の役割は渉外・通訳だった。けれども出発に至るまでの五年間、三人の子の出産・育児・転勤と、肉体と精神のバランスを失うほど日常の雑事に追われている私だった。機会を得て、すぐに自分の顔に戻ることはできても、以前、仕事をしていた時のような勤はなかなか戻らず、旅先で人知れず悩んだ。それ以来、今までの自分にこだわって生きることをやめた。もっと柔軟に自分を育てる場を選びたい、生活人としての活動の中からネットワーク作りを広げたいと思うようになった。

近所の友人たちと△親子映画会Vを作り、自宅を開放している。月に一度、小学生や幼児、その母親たち約三十人が集まり、地域の情報交換もしている。夫が転勤族であることから、同じ境遇の仲



間もふえ、今は各地に散らばっている。△BOCVの良い点は、仲間同士で能力を開発したり、互いに認め合って成長し合うことにある。

ある時、私の住んでる団地の粗大ゴミ置き場から集めたイスやテーブル、ソファで部屋をコーディネートし「アイデアパーティ」を開いた。それ以来、仲間の間では、「粗大ゴミ収集の羽後さん」と紹介されたりする。

また一品持ち寄りのセミナーではいつも主婦のアイデア料理が集まり、そこからパーティ料理部が生まれた。私もスタ

七月の初め、市内のファッションビルでパーティーがあり、出席者は二百人を超えた。私たちスタッフは数日前から打ち合わせや買い出しをし、前日から下準備に取りかかった。材料は、産地直送のものや無添加のものを使いたので、遠くても車を運転して買い出しに行った。



そのパーティは昼間に行なわれたの

旬のものを

使い、ちよつと目先の変わったメニューを考えることが、楽しくもあり苦心する

で、当日は朝五時起きだった。四時間後、出来上がった料理と必要な料理道具を何度も点検して車に積み、会場に向かった。

山下智恵子さんや高橋ますみさんから数人の仲間がすでに待機していた。きゅうりの皮をむく人、バセリをきざむ人、その日彼女たちは下働きに徹してくれた。日頃の彼女たちの活躍ぶりを思うと、ごみ捨てなど頼みにくいだけけれど、彼女たちはそれを楽しんでいるふうになえみ

感じた一日でもあった。

△BOCVでは連帯しなければやれないことも多い。仲間同士が連帯し企画すれば、△BOCVの活動は無限に広がっていくだろう。現代の社会事情をテーマに、いろいろな立場の人間（男女を問わず）が語り合う会もスタートした。一つ一つの活動を通じて新しい仲間と出会い、ネットワークが広がることを願う。

私が△BOCVの中で主体的に生きよ

私が△BOC△の中で主体的に生きようとするのは、自分の人生を主体的に生きようと同じだと思う。私は今までいくつかの自分を生きてきた。

意欲的に仕事をしていた時の自分、母性にすがらうとする幼き者たちを全身で受けとめ育てていた自分、そして今、新しい自分と出会ったような気がする。

これからもいろいろな活動を通じて自分を脱皮し、仲間と共に成長していきたい。グループでネットワークを広げ、その中に自分をどう位置づけ生かしていくかが今後の私の課題である。

M E N U

- ・ オードブル

- ・ヤドモミファルシーピスチオス
- ・カッパ(WINN)風
- ・タシの味増風味がいのち
- ・カテルウイターのパイ
- ・ミロコニョクア付
- ・エビのワイン風

• サ ラ タ

- ・ポリトステ-ワイクマリネ
- ・モロトクリン-9 サラダ
- ・アチン-9 シーサラダ
- ・キューカンバー-9 アーティチョーク-ポ-ト

• $\tau^i \tau^j = -1$

- ・ワッキー、ナツム ナツム
- ・アトキユ-ブゼリー

• $X \geq 1$

- ・ オートサンディウィッチ BOC 風
- ・ 手作りオイルサーディン他
- ・ サマースパゲティ
- ・ 天ぷら

#

ウィン」のオーブニングパーティーをはじめとして、テレビ会社のカルチャーセミナーのパーティー、あるいは勉強会のあとの小さな打ち上げ等、試行錯誤ながらも、回を重ねるごとに自信のようなものもついてきた。そして、同じ家庭の台所で作る同じ料理にも、一方では、家族への愛情と健康が込められたひっそりとしたものであるのに対して、もう一方では、主婦の社会参加の責任をしょって晴舞台に登場しているものにも思えて、料理の中の個性を発見したような気がしている。

今では、依頼が来るのを待っているだけではなく、企画をたてて、自分たちで仕事を生み出しているとか、いずれ、料理の方法やパーティーの演出の仕方をまとめて本を出そうとか、夢のような話に発展することもある。

〈BOC〉を実家と呼ぶ人もいる。現在進行形の私には、やはり学校と思える。さまざまなが、いろいろな出会いとくらえ方をし、〈BOC〉で育てられ、かつ

〈BOC〉を育てている。〈BOC〉の世界は、女としての思いが、どこかで共通している、そんな安心感が満ちている。だからこそ、心を開くことも、不安な仕事に挑戦することもできるのだと思う。私はここで、二足のわらじでも、三足のわらじでもはいてみたい。そんな気持ちにさせられている。

たった一日の体験から

篠原 ナミ子

まっ白いドアを開けて中に入ると、絞りと藍染めの作品が美しく並べられており、赤いじゅうたんの上に白いテーブルが置かれ、すてきな空間を作り出している。

転勤のため、東京から引っ越して来て三か月。じつと家に閉じ込め、東京とはまるで逆の生活が続いた。「自分のことばで話したい。仕事へのきっかけをつかみたい」という気持ちがあふくらんでいた。

時、「主婦の能力を生かそう——経済的に自立も〈東海BOC〉という新聞の見出しが目に入り、さっそく訪ねてみたわけである。

訪ねたその日に、高橋ますみさんから「午後から『あごら』(八月号)の第一回編集会議がありますが出ませんか。これは、お金とは関係ないけど、仲間作りと自分の再教育の場としては良いと思いますよ」といわれる。メンバーズカードの「やってみたい仕事」の欄に、雑誌などの企画編集と書いたばかりである。

「もう仕事がやってきた。なんとす早い対応だろう」と驚いてしまった。

編集会議の中で、今ぶつかっている問題は何なのか、一人ひとりの状況がわかってくるにつれ、初対面の違和感はなくなっていく。仕事を持つようになってからの夫との関係、地域の中では話せない自立についての問題、老後を保証し合うとは、など、次々と出される話に対して、みんな真剣に考え、具体的な提案がなされていく話し合いに、やっと名古

屋で自分の場所を見つけられたような気持ちになった。

五年前、東京の社会教育会館で、教育問題講座を二年間続けて企画したことがあった。仕事をやめて間もなかった私にとって、「専業主婦の生き方」が大問題であった。二人の子どもを育てながらの共働きは、綱渡りのような生活だったにもかかわらず、その充実感はほかにたえようもないものであった。空っぽの自分を何とか奮い立たせようと、講座に通いつめたのである。

「今の子どもたちに必要なことは、地域の教育力を高めることであり、そのためにはまず『家を開く』ことである」という講師のことは、私に新しい眼を開かせてくれた。それ以後、子ども劇場の事務局を手伝いながら、青山にサークルを作り、お母さんたちの話し合いの場として、子どもたちの勉強会や子ども会の場として、わが家を開放していったのである。学校ではPTAの広報誌作りを三年間続け、さまざまなテーマで特集を組み、



カラーでお目にかけられないのが残念、まっ白いケーキのようなステキなBOCです

新しい試みも重ねていった。

その間、何度か悔しい思いをさせられた。どうして、社会も女性たち自身も、「主婦」という枠をつくりたがるのだろうか。やるなら、自分のキャリアにしたいと思う私と、「主婦なのにそこまでなくても」という人間関係に耐えられず、もっと厳しい場に自分を置きたいと思いはじめていた。

〈BOC〉は、ステップを踏みたいと思っている者にとっては、とてもよく考えられたグループである。教師をもう一

度やりたいと思っている私にとって、すぐに仕事はないのである。選ばなければすぐあるのかもしれないが、時流にのった教育の場に身を置きたくないという思いが逆に遠ざけているのかもしれない。『ひと』という教育雑誌をもとにしてできた勉強会に、いま参加し始めたところだが、何を学ぶにも大変費用がかかるのである。自分の再教育のお金ぐらいいは、自分で稼ぎたい、と思っていた私は、多くの収入が得られなくとも、将来の目標実現へ一歩近づける場として〈BOC〉の仲間に入ったのである。

堂々と勉強し、堂々と自分のやりたいことをやるには、少しでも自分の収入を得ることではないだろうか。経済的な自立は、精神的にも開放され、人間関係をも変えていくものである。共働きと専業主婦の両方を経験した私にとって、今後は、働き方の問題についても学んでいきたいと思っている。

たった一日の体験から、私は、私自身の一步を踏み出そうとしている。

△東海BOC△

新人生の記

倉上雅子



△東海BOC△を知ったのは、いつ頃だったろうか。五、六年前から時折、△あごら東海△や△東海BOC△の小さな記事や集会案内を新聞で見て、気になっていた。

そのころは主婦は家事や育児に手を抜くべきではないと思い込んでいた時期。勤めに出る奥さんたちを横目で見ながら「子どもを他人にあずけて働くなんて、おかしいわ」「出来合いのおそう菜を買うなんて、恥ずかしい」などと、専業主婦仲間で言い合っては、自己満足していた。

その実、主人が死んだらどうして食べていこうかという不安が消えない。翻訳をやりたくて勉強を続けていたが、講習会に出るための、ささいなお金や時間のやりくりにも、つい夫や子どもに気がねししてしまう自分が、情けなくもあった。経済力がないと自信も持てない、自分の収入が欲しいという思いが、だんだん大きくなってくる。とりあえず、新聞で仕事探し。しかし、フルタイムで働くことは避けたかった。まだ小さい男の子二人と、家事能力は小学生並みの夫、合計三人の扶養家族がいる。家事全部を一人で引き受けた上に、八時間も仕事に出かけるのはきつい。翻訳の勉強に、できるだけたくさんの英語本を読みたいから、せめて一回二、三時間の、自分だけの時間が欲しい。会社人間の男性の生き方に疑問も感じていた。

考え方が甘いと言われるのは承知の上で、そんな条件をつけて仕事を探したから、あるはずがない。雇う側から見れば、私などはさしずめ、体力は下り坂でも、

口だけは達者な子持ちの中年女というところだろうか。条件の良い仕事は、もつと若い女性に行くのは当たり前、そう気づくと、結婚退職でキャリアを中断してしまったのは、考えが浅かったとしみじみ後悔した。

そんな折、クロワッサン誌で、△東海BOC△の紹介記事を読んだ。△BOC△の具体的な内容を知ったのは、その時が初めて。少し前に、高橋ますみさんの講演を聞いていたことも手伝って、今の行きづまりを開く道が何か見つかるのではと期待して早速問い合わせしてみた。毎月セミナーが開かれていることを教えてもらい、今年二月に初参加。大雪で寒い日だったが、気持ちが弾んでいたのを覚えている。

セミナーへの参加回数が増えてくるうちに、△東海BOC△は「雇われずに経済力を得る」方向を目指している、と、わかってきた。そして、グループで支え合いながら、経済力を得られるように育てゆくことが目標であることも。どこか

の会社に雇われることが働くこと、とし
か考えてこなかった私には、この発想は
新鮮だった。

参加してから日が浅いので、〈BOC〉
がこれまでに開発してきた仕事、どの
くらい実際の収入に結びついてきたかは
よくわからない。正直言って、お金には
ならない仕事もあるようだ。私自身にと
っても、〈BOC〉をどのように自分の中
に位置づけていったらいいか、まだよく
方向が見えてこない。でも〈BOC〉に
は仲間がいる。集まって話しているだけ
でも、十分刺激を受けるし楽しい。皆の
能力と個性が合わさって、今後どんな形
の仕事が生まれてくるか、とても楽しみ
にしている。

〈BOC〉と私

倉田 良江

私は、〈BOC〉の会員になって七か月
あまりです。〈東海BOC〉の存在は以前

から知っていましたが、はたして登録す
るに価する能力が自分にあるのか自信が
なかったし、育児に手がかかっていたの
で、もう少し後にしようと思っていた間
に五、六年過ぎてしまいました。思いき
って今年一月から仲間入りして本当に良
かったと思っています。

毎月行なわれるセミナーに参加し、最
近では、「フリーライターセミナー」を受
講しましたが、とても役にたったと思い
ました。

各セミナーの内容もバラエティーに富
んだものが多く、講師の人選も良く、今
では〈BOCセミナー〉が楽しみになり
ました。これらのセミナーを企画される
スタッフの方の努力とセンスには頭が下
がる思いがします。

各セミナーの受講者とも親しくなり、
皆さん前向きに人生を歩んでみえる方ば
かりで、私には良い刺激となりました。
それにしても、〈BOC〉の登録カード
はすばらしいアイデアだと思います。
各自の能力を登録し、経済的な自立を

めざす女性を育てていこうという主旨に
は賛同しました。それもグループでお互
いに応援したり仲間意識を育て合ったり
する雰囲気も良いと思いました。

今はまだ、〈BOC〉から知識を吸収
したりして学びの途上にある私ですが、
〈BOC〉で培った体験を自分にプラス
して、〈BOC〉とともに成長していきたい
と思っています。

〈BOC〉に登録する前にいろいろな
サークルや同好会に所属しましたが、な
ぜか表面的なおつきあい程度で終わって
しまい、一抹の寂しさを感じたものでし
た。〈BOC〉には、いろいろな能力を持っ
た女性が多くみえます。分野別にみても、
キャリア別にみても、千差万別です。で
も共通項があり、それによって、仲間意
識も強固で、特に何か新しいものに挑戦
しようとか、仕事を与えられたときのパ
ワーは、目を見はるばかりです。しか
も、一人一人がお互いの立場や個性を尊
重しあうムードがあり、皆が生き生きと
しています。私も〈BOC〉の一員にな

って、以前より向上心が高まり、自信がついたと思っています。

以前は、職さがしをはじめ、経済力をつける方法を手さぐりで独力でやっていたが、今は、自分を理解しおしみなく協力してくれる仲間がいると思うと、何をするにもエネルギーが持てます。

△BOC△を知って

太田 侑 希

フリーライター・入門セミナーの受講者募集の記事を、中日新聞の、会と催しガイド欄で目にとめてから一週間。親指ほどの小さな記事が、私の心にはりついて離れなかった。

私は、地域の文章教室で、人間不信に陥り、書くことはもちろんのこと、話すことにも、生きることに臆病になり、一年あまりも、自失した日を、過ごしていた。本音を書き、本音を語れる場が欲しかった。

新聞記事の「フリーライター」に心惹かれたのは、そんな状態の時であった。

しかし、日記程度の、生活作文を書いていくにすぎない、五十路をこえた主婦が行くところではないノと、受講への昂まる気持ち、もう一つの心が抑制していた。

——フリーライターのノウハウがわかるだけでも良い。その事より、セミナーの参加によって、自分をとり戻すことへの触発になれば良い——そう思い至って、セミナー当日の早朝、思いきって電話をした。

電話に出られたのは、高橋ますみさんだった。どんな人たちが、何人ぐらい参加されるのかと、不躺なことをおたずねした。ますみさんは「年齢も、資格も問わないから、気楽にぜひ」と、△BOC△の簡単な説明と、道順を、気どりのない口調で、親切に教えて下さった。

躊躇している時間はなかった。振り切れない縁を感じて、会場へと急いだ。その日の講師は、高橋ますみさんだった。

た。受講者は、私を入れて十一名だった。参加した理由や、自己PR、その他話したいことを自由に、と、いうことで自己紹介が、はじまった。



聞いているうちに、ますみさんと面識のある方ばかりなので、私ひとり異分子に思えて、落ち着けなかった。私は、△BOC△も、△あごろ△も高橋ますみさんも、そのとき、はじめて知った。自己PRできるものも、確たる参加理由も話せなかった。

なごやかな雰囲気だったが、シリアスな二時間の講義は終わった。連帯を持ちながら、ひとり、ひとり、歯切れのよい自由な、位置づけがあるのを感じた。

講師を、先生と呼ばず、名前を呼び、メンバーと同じ線上での話しぶりが、と

でも新鮮に映った。配られた教材には、
「BOC可能性教室・フリーライターセ
ミナー入門編」とあった。

私は、生来、納得ができないと、前へ
進めない性格である。それなのに、「BO
C」も理解できないで、背のびして、の
ぞき見状態のまま七回のセミナーを終え
ていた。

〈BOC〉を理解したいと思い、高橋
ますみさんの著書『主婦が歩きだすとき』
『女40歳の出発』『あごろ』を読んだ。ス
ペース・ウインのオープンニングや、六月セ
ミナー「オフィスでの抹茶、煎茶のおも
てなし方、いただき方」にも参加した。
私なりに、少しずつわかってきた。

雇われないで収入を得ることは雇われ
る受身の仕事より、責任の重い、きびし
いことだと思う。

今私は、思いがけず『あごろ』の編集
スタッフに加わり、原稿用紙に字を埋め
ている。とまどいながら、かかどが地に
ついてないままたしかに歩きはじめた。
たどたどしいが、本当の自分が、ことば

が、とり戻せそうな気配を感じる。
新しい道に、足が下ろせそうなの……。

老人とともに歩いて

祖父江 富士子

姑は七十五歳のとき脳梗塞でたおれ、
半身不随となった。入退院を繰り返して、
八十一歳で帰らね人となる。六年余の介
護生活は、私に多くの老人問題を考える
機会を与えてくれた。だれにでもおとず
れる老後生活は、身体が弱ったうえに予
期せぬ出来事も起こる。そのとき、どの
ように対応して生きたらよいのか。姑の狼
狽する姿に出会ったとき、深く考えさせ
られた。

精神の持ち方で、まわりの状況も変わ
る。また、老いは突然やってくるのでは
なく、日々老化していることも自覚して
生活することが大切である。老人になっ
てから老後生活を考えるのではなく、ラ
イフワークのなかにしっかり老後の位置

づけを組み込んだ生き方をする心がけが
必要である。その人がどう生きたかによ
って、老後もきまってくる。

明治生まれの姑は、子ども十人産み育
てるなかで「老後は、子どもたちが世話
をしてくれる」と、堅く信じて生きた人
であった。ところが現実とは違ったのであ
る。過去の思いが予期せぬ半身不随とな
った体に重くのしかかり、愚痴と不満と
涙の老後を送ったのである。そういう状
況のなかで、介護する側のつらい立場も
味わった。身体が不自由（病気）になる
と精神状態も乱れ、心まで病気に冒され
る。介護する者も、身体が疲れるうえに
気持ちがあふぎ込むこともある。精神力
を身につけ心の健康を持続する生活の知
恵が大切である。（精神面での自立）。健康
な心は、本人はもちろんのこと、まわり
をも明るくする。

社会の変化とともに人間の生活も変わ
ってくる。子の数が一世帯二人を割った
日本の社会も、今までの血縁関係から、
地縁関係、心縁関係へと移りつつある。

子どもの少ないうえに核家族の時代となった現在、子どもと同居できる老人は少ない。老人夫婦、独居老人が増加しているにもかかわらず、今もなお社会通念として老人介護は嫁(女)の仕事として根強く残っている。

私は姑の介護を終えたあと、昭和五十八年から、地域の老人介護員として働き始めた。各家庭を訪問する度に、核家族のなかで年老いた両親のいる場所がない現状を見た。ボケ老人のいる家庭は深刻である。急速に進む高齢化社会のなかで、いま家族に何が起きているか。老人たちは不安のなかでどのような暮らしをしているのか。体験をとおして記録をまとめてみたいと思うようになっていたとき、(東海BOC)の可能性教室、フリーライターセミナー養成講座の開催を知った。書くことの苦手な私が、老人の実態を記録したい一念から、早速受講したのである。セミナー終了後、『月刊あごら』の企画編集に参加した。集まりの場で、貴重な体験を話す仲間たちは、キラキラ

輝いている。その場にいただけで新鮮な感覚が伝わってくる。楽しい雰囲気なかで企画編集が進んでいった。

私は(東海BOC)のなかで、老人介護の体験をとおして、中高年の問題に取り組みたいと思っている。私がしたいことは、都心に高齢者が安心して暮らすことのできる「コミュニティセンター」の備わった活気ある中高年ホームの建設である。

“いい女になりたい”

深田 セツコ

「書く」という仕事を始めてから二年が過ぎた。何かしたくてもんもんとしていた矢先、(BOC)を通してみつかった憧れのライター業である。

そのライター業に目を白黒させていたそのころの私。今もその当時と、その大変さには変わらない。

さまざまな生き方を持つ人びとに出会

った。その出会いは、私にとって、見ることに聞くこと、なにもかも新鮮で、ものめずらしかった。そのことをどう文章に表わそうか、それは苦しい作業だったが、出会った人々の魅力にひかれて、その苦しさも苦にならずにすんだ。

たった一つの言葉を選ぶのに、包丁を動かしていても、寝床にいても、こたわり続けていたこともあった。それが私には仕事をしているという実感でもあった。

ライターをするまで、私は全くの専業主婦。趣味の刺しゅうを月に数回教えに行くのが、私にとって主婦から離れられるわずかな時間だった。が、集まる女性たちも私と同じ専業主婦たち、おたがいに趣味で結びついている仲間たちである。社会的な視野に富んでいるとは言いがたいのも事実である。こうした集団しか知らなかった私には、(BOC)は社会へ目を向ける窓口になった。この窓口を通して、大げさにいえば(これは実感なのだけれど)いきなり世間にとび出したのだ。見るもの、聞くこと、どれもこれも目新し



く見えたのも無理のないことである。

毎日新聞の「ウーマンズブラザ」の「老いと私」が最初の仕事だった。チームを組んだ〈BOC〉の仲間たちの姿が、まざまましく見えた。

次に知ったのは、仕事の大変さである。取材対象の人物を探すことに始まり、取材のOKをとりつける交渉、インタビュ、最後の作業が書くことである。

よく言われたことは、「対象が決まれば、もう六分どおり書けたと同じこと」ということである。アンテナのほとんどの私には、取材相手を探すことは大変な仕事だった。友人知人にかたっぱし

ら聞きまわることから、その仕事は始まった。

仕事を続けていくうち、私のアンテナも少しずつ広がっていった。リポーターとしては喜びである。が嬉しいことばかりがあるわけではない。考え抜いて、考え抜いて使ったはずの言葉が、書かれた人に鋭い痛みを与えてしまったこともある。『書く』ことの恐ろしさも思い知らされた。それでも、この二年『書く』ことにこだわり続けて来た。

時間がかかる割に、あまり収入には結びつかない。また経験の浅い私にコンスタントに仕事がくるわけでもない。生活を支えていかなければならない身だとしたら、とても続けていけない仕事である。でも、この仕事での自立は大変なことと思いつつ、やはり『いつかは』という、夢を捨てきれないでいる。

『書く』ことが、私に社会とどこかで結びついていくという実感を持たせてくれる以上、細い糸をたぐりながらも、続けていくだろう。

仕事のおもしろさにひかれて、この二年、家庭の多少のあつれきを見捨てた。仕事にも少しずつ慣れてきた今、家庭の中で、この仕事をどう位置づけているか、一つの課題を抱えている。

いつか高橋ますみさんがとてもいい言葉を聞かせて下さった。『BOC』はい女になりたい女の集まりよ』

〈BOC〉という女の集団の中で、どう自分を磨くか、磨いていけるか、それは私次第にちがいない。

〈BOC〉を『利用』しながら、『書く』ことを通して、私は『いい女』になりにくい。

あとがき

高橋 ますみ

〈あごら東海〉の例会で、女性の自立について話し合っていた子育ての中の主婦たちは、自己再教育に、仕事探しに、お店開きにと、行動しはじめるようになりました。

〈東海BOC〉は、そんな中で個人ではなく、グループで何とか道を探し出せないものかと、七年前に始めた実験活動です。

ところが、主婦が集団で金諸けをはじめたなどのかげ口もあり、〈あごろ〉のネ



画廊も兼ねているスペース・ワイン

ットワークの中でもなんとなく市民権を主張しにくい存在でした。〈東海BOC〉は、個人で試みていたことをグループでやっているだけのこと、そう簡単にお金もうけなどできるわけではありません。私たちの実践が、女性解放の道筋の中で、どう位置づけられるのか、または位置づけられないのか、批判は、きちんと受けて次ぎのステップにしたいと願っています。

〈東海BOC〉のスタートから現在に到るまでのいきさつを、『女四十歳の出版』(学陽書房)としてこの夏出版しました。発売から一か月で、すでに出版元は品切れで、重版のご相談をいただいています。

小著はあくまでも私の側から見た〈東海BOC〉で、他の方から見れば、まったく別の〈東海BOC〉が描かれるのではないかと、そんな意図で、今回は、〈東海BOC〉特集をさせていただきました。皆様のご批判を謙虚に受けて、今後の方向づけの参考にさせていただきます。

この号の執筆・編集は、〈東海BOC〉企画のフリーライター養成セミナーの修了生が中心になって担当しました。この号の出来ばえをキャリアにして、新しい仕事を探しに歩く予定です。

〔編集〕 池戸清子 太田侑希 倉上雅子 倉田良江 桜井京子 篠原ナミ子 祖父江富士子 高橋ますみ 羽後静子 深田セツコ 山下智恵子
〔カット〕 岩田和子 大橋倫子

〈東海BOC〉についてのお問い合わせは
〒459 名古屋市緑区大高町伊賀殿107
高橋ますみへ ☎052-622-4926



「おわび」一〇八号18ページ「腸内出血」は「脳内出血」「眩しい」は「眩しい」の間違いでした。おわびして訂正いたします。

〈東海BOC〉——これでいいの？

月刊『あごろ』は各拠点の持ち回り編集になっていますが、それを印刷に入れる作業は新宿の仕事を。〈東海BOC〉から寄せられた原稿をもう一度みんな読んで読み直しているうち、「これでいいのだろうか」という率直な意見が、メンバーの一人、Mさんから出ました。

「働く」ということは、こんななまやましいものじゃない。受講生の手記も、もう一つ心に響くものがない」という、かなり手きびしい批判です。女の職場の中でも最も厳しい民族で三十年働き続けたMさんの発言は強烈で、一座は一瞬シーンとしましたが、それをめぐって、比較的長い間働き続けてきた人、最近働き始めた人、働くことを模索中の人、それぞれの立場から活発な意見が交わされました。

S からだ具合が悪い時でも這ってでも行くのが職場だ、ってMさんはおっしゃったけど、そんな働き方に反対して、私たちは別の生き方を模索してるわけでしょ。

E でも、是非はともかく、現実今の日本の社会では、なまぬるい働き方は許されないというのも事実。

Y だからといって現実を肯定していたのでは、いつまでたっても変わらない。手記は、私にはどれもピンと来ておもしろかったけど。K 今の男たちの働き方に私たちは反対しているからこそ東京の〈BOC〉も創られたと思うの。「女の働き方」の実践の場として……。東京も初めは〈東海BOC〉が今やっつてるところと同じようなことをしてたけど、「なぜ働くのか」ということを自らに問わずに働き始めても意味がないことに気づいて、〈BOC〉は

縮少し、〈あごろ〉に全力投入してきたわけ。

でも〈BOC〉を始めた二十二年前と今とでは女の人の意識もずいぶん変わってきた。今、〈東海BOC〉がこういう形ですることは、

それなりの意味はあると思う。

T 何もしないで、腕こまねいて批判だけでも変わりっこないものね。

C Mさんのように第一線で働き続けてきた方がじれったく思われる気持ちはよくわかるし、ますみさん自身もそれは百も承知だと思ふのよ。彼女も民放でバリバリ働いてた人だから。ともかく一歩踏み出すきっかけを……という気持ちだと思う。

M だけど、フリーライターなんてそんなに簡単になれるものじゃない。

C それは同感。講座の題名を聞いたとき、ますみさんのだなぁと思った(笑)。私たちな

らせいぜい「文章を書くことが好きになる講座」ってところ……。山下さんのような作家がメンバーにいないってこともあるけど。

T 幻想をふりまくことになるんじゃない。

C それを承知で幻想をふりまくところが名古屋らしい実践だと思ふの。幻想でも何でもいい。題に惹かれて集まった人たちとバッチリ話し合う……。

A そういう題だったら、行ってみようか、という気になりますものね。

Y 主婦はきつかけがないとなかなか踏み出せないんですよ。私も子どもが大きくなって何かしたいしと思つて、まず区の婦人学級に通い出し、一年たつてやっとパートに出たわけ。Mさんのような方から見ると、主婦は甘ちゃんに見えるでしょうけど、自信がないんですよ。

S コンプレックスがあるんですね。

C 負い目は働いてる側にもありますよ。ゴミ捨てとか掃除とか、お世話になることもたくさんあるし。

T 「お母さんが作った世界でたった一枚の洋服よ」なんて着せてるのを見ると、ああ、私も作りたいのに……と思う。

C そんなふうに互いに負い目を持つのは、お互いの状況が見えないからでしょう。主な生活をする場が海と陸のように全く隔たっている。お互いをもっと見えるように、そして海の暮らしも陸の暮らしも楽しめるようにしたいというのが私の持論。何もしなければ、たとえばTVの画面で海を見て「泳ぎたいな」と思ったり「怖そうだな」と思ったり、「私も泳げるはず」と思うだけで終わってしまう。「私だってできるのに……」と思いつつ一生終わってしまうより、できるかできないか、まずは踏み出してみれば、コンプレックスも



輝いて生ききった 女のひと

「がん」——それも治りにくい「がん」と言われたとき、自分ならどう生きるだろう。

解消するんじゃないかしら。

M だけど、試しに働くなんて、職場はそんな甘いもんじゃない。能力のない人には仕事は与えられない。若い人でも窓際族ってのはありますよ。

C そういう批判は、働きたした本人が自ら受ければいい。そこに成長があると思う。私たちが「そんな形で働いていいのか」と足を引っ張らなくてもいいと思うの。西川きよしが言ってたじゃない。「しろうとしろうと」って言われるけど、誰だって初めはしろうとだ」って。

E 女もできるだけ外働きもするようになるれば、男の人も今のような長時間労働をしなくてもよくなるでしょうね。

Y 全員が今のパートなみになればいい。

C 楽天的すぎるかもしれないけど、私はどんなことでもやってみればいいと思ってるんです。そこで「女の働き方」をしてみる。そ

NTVドキュメント86「生きる——鈴木茂子の輝き」は、さまざまなことを考えさせられた。

がんと闘って十年、茂子さんは病状を克明に日記に記し、痛みのグレードも仔細に主治

れが結局「男の働き方」を変えることになるんじゃないかしら。

S 今は男の人たちの働き方も変わってきたね。若い人たちにとっては、仕事よりも家庭、の時代。

C 日本の企業は「夜のつきあい」で成り立つと言われてるけど本当にそうなのか……。へBOCでではそういうつきあいはいついそがないけど、とにかくつづけない(笑)。

編集には残業はつきものと言われるけど、それもほとんどなくなつたし。もともと二十二年もかかってやっと今年からだけど、子連れ女で構成してきたからこそ可能になったという気がする。ただつくづく思うのだけど、「女の働き方」を続けるのは周りの社会が変わらないかぎり本当に大変だということ。このごろ女の企業がずいぶんふえたけれど、男以上のモータリゼーション企業じゃなくて、「女の働き方」を模索する企業がふえるとうれしいな。

医に報告する。二十から四十までは、私、突っ張りだったの。すなおに甘えられるようになったとき、感謝も深いものになった」と。

その茂子さんをやさしく見守る夫と看護婦さん。「海外に行きたいと言えば行かしてくれ

るでしうけど、病気になる女と思わないで結婚した夫がかわいそう」と、残された時間の限り絵を描く。その絵が病院の玄関を飾ったとき、茂子さんはもう動けない。そしてやがて院内の主治医に静かに電話が鳴る。「九時十五分、茂子さん、やすらかに昇天なさいます」

中でも感動的だったのは、自分の病状を若い看護婦さんたちに説明するくだり。看護婦さんたちもまた「助からない患者を前提に、率直に「死ぬ心構え」を質問する。話に聞くホスピスとはこういうものか。キリスト教系の病院とは言え、淡々と生の終わりを迎え、看取る両者に感動した。(東京 上田 恵)



韓国に老いた妻たち

ラベルにヒモを通す内職。毎日十一時間、土曜も日曜もなく働いて月収六千円。その指先が、太く短く老いている。

人のしない墓守りで、ほそぼそと生計を立てる老女も。

「楽しいこと、いいことは何もなかった。苦勞、苦勞、苦勞だけ」

韓国人の妻となって四十余年、はじめて里

帰りする元日本人の女性たちを現地に追ったルボは、里帰りの費用が、日本政府から出たのでもなく民間からでもなく、在日韓国人のカンパによることを、短く伝えて終わった。日本が韓国に何をしたのか、そのしわよせはどういう人たちが負ってきたのかをまざまざと示す映像だった(TBS系報道特集)

(神奈川 太田映子)



平等と自立を淡々と実践『車いすのおてんば娘』

両足が全くない。両手の腕から先がない。サリドマイド禍を一身に集めた若い女性がたった一人でアメリカ留学。

でも、その人、中野寿子さんは底ぬけに明るい。英語もみるみる上達、クラスのメンバーにとけこみ、英語劇で大拍手を受けるほどに。そしてなんと、生まれてはじめて水着に身を包み、プールで泳ぐ。

すばらしい素質に恵まれ、心温かな両親・友人たちなど、環境にも恵まれた特別な人かな、と感嘆しながら見ていたが、終わったあとのコメントでホッとした。

「水着の自分をさらすのは勇気がいったけど、自分を振りきるチャンスになると思った。

今までは本屋と画材屋にしか行かなかったけど、これからはどこでも歩き回ります」

彼女ほどの人でも「勇気がいった」と言う。彼女もやっぱりフツターの女の子だったのだ。このことは聞いたとき、はじめて涙があふれた。二時間の画面、通常の「障害者」物語のような、息をつめる思いで見た瞬間はなかった。でもそこに生るまで、彼女はどんな葛藤を重ねたのだろうか。

私は長い間、平等とは何だろうと模索してきたけれど、この瞬間、長い疑問に答えが出たような気がした。平等って、もしかしたらお互いの間に不要な緊張感がないってことかな。

上腕についた赤ちゃんのようなかわいい指で、彼女はステキなイラストを描き、切り絵を彫る。自分が何ができるか気負わないで徐々に探すことが自立につながると思う」と。

こんなすばらしい生き方を見せて下さった寿子さんに、そして、水泳の場面を撮るまでの人間関係をつくり、淡々と画面にまとめたくださった制作者の皆さんに、心から感謝した。(テレビ朝日系) (東京 斉藤千代)

(追記 あまり感動したので寿子さんにお目にかかり、『あごろ』十月号の表紙絵をお願いしました。ご期待ください)

●「均等法」で大幅に伸びた女子新大卒の求人

今秋の大卒採用予定、男子は二一％ダウンの中、女子は二一％アップ、初めて女子を採用する大手企業は百四十一社、とリクルートリサーチが発表。たしかに各大学に「男女」の求人はふえています、が、「本当に女子を採用するのか」と女子学生の間には不安の声。早大などは「男子の予測もつかないので実際の男女比を各企業に問い合わせています」とのこと。「建学の精神に反しますが現実的対応として」と。

一方、会社訪問の解禁日は大卒が八月二十日に、短大は四十日遅れの十月一日。大卒がふえる分だけ、短大卒が減りそう…の声も。

●スタートした「人材派遣法」——「派遣一〇番」もスタート

七月一日スタートの人材派遣法で許可された事業所は全国で四百三十一。円高不況もあり、派遣業の利用は今後ますますふえそう。これに対し（労働者供給事業関連労働組合協議会）は「へろきょうユニオン」を結成、未組織派遣労働者を守るとともに「派遣一〇番」を開設しました。東京は031122116637、大阪は06145313600。

●女性史研究に朝日学術奨励金

性別役割分担の変化を軸に日本人の生活史をとらえようとするユニークな研究が、人文科学部門で朝日学術奨励金を獲得しました。鳴門教育大学の脇田晴子教授を中心に、中京女子大の伊藤康子、橋女子大の田端泰子各教授、総合女性史研究会の永原和子さんなど、最先端の女性学者たちで分担、三年後くらいに刊行の予定。

●戦後総決算、「社会科」も……

文部省の教育課程審議会は、七月二十二日、①小学校一、二年の理

科・社会科は「生活科」に改める。②小三以後の社会科を「①本人としての自覚のかん養」を重点に抜本的に再編成する。③高校の「現代社会」の必修を改め選択とする。④中・高校の男子の必修「格技」を「武道」と改称。⑤道徳の「準教科」化を進めるなどの基本方針を発表、「戦前回帰」の姿勢を明らかにしました。

●体外受精の受胎率向上

国内で一〇％弱、海外では二〇数％の確率と言われる体外受精に、埼玉県越谷市立病院が新しい方法を開発、妊娠率を四〇％に向上、入院も一日でOKと、日本受精着床学会で発表。

●ビル解禁の方向に

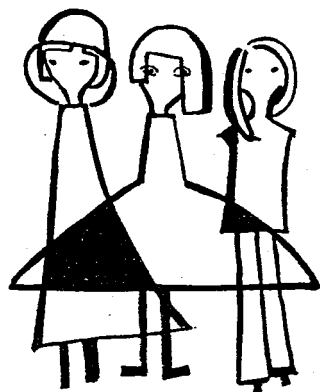
厚生省の「経口避妊率の医学的評価に関する研究班」は①ホルモン量を減らした低用量ビルに焦点をしばって有用性の研究を進める②企業の製造・輸入承認申請に必要な「臨床試験ガイドライン」をつくるなど、解禁の方向で方針を決定。報告書は年内の予定ですが、実際に承認されるのは三、四年先の模様。

●男風呂が女風呂に化ける傾向

最近、どここの観光旅館でも、女性客の数が男性客の数を圧倒。「上客なのに浴場が違いすぎる」という不満が続出。女性の団体客が多い日には、男風呂と女風呂の標札を掛け替えている旅館が多いようです。新築の場合も、今までのような男女差はなくなる方向に。「女性客は食事や食器などウルサイ人が多いので閉口ですが、数には勝てません」という旅館主も。何の彼らと言っても、やはり数で進出することが情

自らを装う

No. 2



「センスって何だ？」

昨年、ファッションについての座談会に出席して、ふっきれた気がした。今までの私は、なんと保守的であつたのだろう。女らしい格好というものにはとらわれていなかったが、自分自身よりも他者から見て、異和感がないようにと選択し、結局のところ無難に徹していた。この保守性とはこれからはおさらばして、自由に、装うことを楽しもう。お金も暇もあまりなく、その上コブつきで、おのずと

制限はあるけれど、でも私そんなにセンスが悪いわけじゃないんだからと心の奥深く決意したのである。

ところが、どうもできない！ のびのびとステキにはならない！ 今まで通りの「普通の格好」しかできない。ひょっとして、私ってダサイのかしらとの疑いがじわっとしのび寄ってきた。そもそも自分のセンスは悪くないと信じていた理由は何だったのか。真剣に考えてみると、ありました。第一、学生時代、油絵を描いていて先生に色彩感覚が良いとはめられたこと。第二、少女時代、スタイル画を描くのが好きで、片田舎の小中学校で「マサコちゃん、上手ねえ」と言われていたこと。あゝあ、何と恥ずかしいこと。自己を認識するって何と難しいこと。それから、これは自分でもはつきりと断言できないのだけれど、「ファッションセンス

というものは努力によって向上する。赤毛のアンじゃないけれど、誰でも少し気をつければもっとステキになれるはず」との思い込みが私にはあった。この思いこみも最近ぐらついていた。もしかしたら、おしやれを嫌味なく楽しみ、かつそれが他者の目にもステキに映るというのは、一種の才能の分野ではなからうか。

絵画や音楽などなら自己の才能のなさは早くから自覚できやすいけれど、ファッションは生活的、日常的かつ一般的である分だけ、深く考えてみることもないし、自分にセンスがあるかないかを、つきつめる必要にも迫られない。その証拠には、私の友人たちは、「ダサイ」と言われると「今はこんなふうだけど、本当は違う。その気になれば私だってセンスが良いのよ」とのたまうのだ。ファッションセンスは才能なのか、努力なのか、この件に関しては、この欄の他の書き手の皆さんにもぜひ究明してもらいたいところである。

これから先、私は装うことをどう楽しむのか。何だか、楽しみが倍になり、迷いが倍になり、結局のところ元の木阿弥ではないかしらという気もしている。

(札幌 今村雅子)

のも嬉しいことでした。また、矢野百合子氏の手記を大変大切なものとして読ませていただきました。男性中心の研究会では一度もふれられてなかったことで、これこそ『あごら』のなすべき適切な仕事であったと思いました。

(水戸 酒井はるみ)

〔新入会〕

◆狭い意味での女性解放にとどまらず、人間解放へとつながる広がりとしなやかさを持つ『あごら』にひかれて入会しました。学生ですがお手伝いできるようなことがありましたら、ぜひ参加したいと思います。

(東京 宮城礼子 美大生)

◆実は二、三年前『あごら』にしようかA誌にしようか迷ったのです。当時はA誌のほうが読みやすく『あごら』は私には難解で、とても読む気にならなかった、また購読料も安く、私にも参加しやすそうだったので、結局A誌にしました。それから『紀の女大学』を発足させ、私自身、少しずつ女性学を勉強して成長したのでしょうか(成長したと思いたい)、『あごら』を購読することになりました。私たちの機関誌、同封します。おひまな折にでも読んでいただければ幸いです。

(和歌山 恩田景子)

◆暑中お見舞申しあげます、という文章と若干の近況報告、それに涼しそうな絵でも……本来なら、そんなハガキを書く予定でしたが、今回は緊急にお伝えしたいことがあり、こういう、ちょっと厚めの封書になりました。

去る四月二十六日にソビエトのチェルノブイリで原子力発電所の事故が起こったことはすでに周知のとおりです。その事故による環境や人体への影響についても、お聞きになっていると思います。放射能の影響は、日本にも、当然のことながら及びました。いや及んでいきます。事故の一週間後、つまり、五月の連休に日本で降った雨には一万三千ビコキュリー(原子力安全委員会による緊急対策基準値は三千ビコキュリーだそうです)もの放射能が検出され、母乳や牛乳からも高レベルの放射能が検出されたそうです。

と書いても、あまりピンとこないのが事実だと思っています。私も、〇〇キュリーなんて言われても、「それは大変だ」と思うくらいで、危機感を覚えるというほどではありませんでした。ただ、あの事故以来、できるだけ子どもを雨にぬらさないようにし、牛乳を飲まないようにしたぐらいです。

私が大きなショックを受けているのは、欧

州からの報告です。子どもたちは屋外で遊ばせない。芝生の上で日光浴をする人はいない。牛乳や穀物が大量に捨てられている。女性たちが次々に妊娠中絶をしている……etc…

チェルノブイリから一〇〇キロも離れたボイランドで通常レベルの五〇〇倍もの放射能が検出され、チェルノブイリから一〇キロ以内の地に住んでいた人々は、想像もできないほど多量の放射能をあびたと考えられます。死者は二十七名とも三十四名とも言われ、今なお、増えつづけているのです。

放射能というのは、色にも臭いもないし、たとえば、事故後降った雨によって、日本で死んだ人はいません。でも高レベルの放射能は雨に含まれ地上に落ち、植物や水、土に浸透し、その植物や水を体内にとり入れることで、私たちは確実に汚染されるのです。

汚染が持続し、濃縮され、自然のサイクルは、自然ではなくなるのです。この八月で四歳になる娘が三十年後にはガンになるのではないか、いや、もしかしたら、ガンどころか、もう生きてはいないかもしれない、と思わざるをえないのです。というのは、原発銀座と言われる日本の現状を考えると、もう、今日、あした、チェルノブイリのような事故が起こ

っても不思議はないし、そうなれば、日本中に、考えられないほど大量の放射能がバラまかれることが、予想されるからです。

私は思います。危険な原発とひきかえの豊かなくらしなんか欲しくない。夏の暑さをがまんすることで電力消費量が減り、原発が不要になるというのなら、私はクーラーは使わない。(本当は電力会社の宣伝はウソで本来動かせる発電所を休ませておいて、わざわざ原発を動かしているのです)もう、こんな、原爆を抱えた生活はいやだ、と……。

今、私はとても危機感を抱いています。チエノブイリは他人事じゃありません。もし本当にチエノブイリのような事故が起こったら、(小さな事故でも、つみ重なれば同じです)もしそうなったら、私たちは生きていけない。子どもたちが生きていけない。

地球上はすでに放射能汚染がすすんでいるから、仕方がない、とあきらめるのは、次の世代に対してあまりに無責任な態度だと思えます。次の世代に「生きていける」世界を残してやることは、おとなとしての義務だと思います。幼い、かわいい笑顔を殺したくありません。

だから、まずは、日本で現在動いている原発をやめ、建設計画をやめさせることに全力を尽くさなければいけないと思うのです。

同封したリーフレット『それでも原子力発電を選びますか?』を読んでください。原発のこわさ、不要なことをまわりの人に、一人でも二人でも伝えてください。そして、原発をなくすために立ち上がるようではありませんか。とりかえしのつかないことになる前に、子どもたちを死なせる前に、原発をとめましょう。

生きていたいから、あえて、今回は、この封書を「暑中お見舞い」の便りにかえます。

〔追伸〕七月六日の選挙で自民党が圧勝しました。これは大変なことだと思います。この前から出したりひっこめたりしていた憲法改定や、国家機密法制定を、きつとやるだろうと思います。それに原発推進も……。選挙の結果に私はガックリ……というか、あきれてしまいました。今のくらしがどんな犠牲の上に成り立っているのか、いかにもうい豊かさなのか、考えない、考えようとしなない人が、日本人の大多数なのかと思うと、もう、ことばもなくしてしまいそうです。こんな日本、すててやる、と思ったのですが、そうもいかず、それじゃとにかく原発をとめようではないか、と考えなおしたしいです。このまま、目かくしをされたまままで殺されてたまるものですか。

(東京 古賀節子)

〔編集後記〕

冷夏から猛暑へ……ナイロビ帰りの日本を暑い!と感じた昨夏を思い出しました。そしてその暑い日本が、「終戦四十年」のお祭り騒ぎだったことを。

ナイロビで私が一番痛切に感じたのは、沖縄とフィリピンのことでした。この二つの地域の方々のお話を聞いて、日本が戦場にしたばかりに、かつての戦場では今も戦争が終わっていないことに胸が痛みました。フェミニストは、「敗戦」とは言っても決して「終戦」とは言うまいと改めて誓いながら帰ったのですが、「戦後政治の総決算」のためには、何があっても「終戦」でなければならなかったのだと今にして思い知ります。

中国の残留孤児、韓国の老いた妻、そして原爆症の人びと……。それだけでなく、戦争に多かれ少なかれ関わった人たちは今も癒えぬ傷に苦しんでいます。戦争だけは阻止したいの思いをこめて、戦争の根源である差別を考える『あごら』を出し続けたいと思います。小さな『あごら』にどれほどの力があるわけでもないけれど、国家秘密法などが出来ないうように言えるかぎり言っていきたいと思います。皆様の原稿をお待ちしています (C.S.)

(九月号は休刊、十月号を早めにお届けします。表紙は中野寿子さんの作品です)